NY旅行記
20,Feb,2011～
@makeanovel

まえがきのように

例えば誰かに特権を感じるということは、それを「特権だと思う」ということであり（同じもののことをちっとも特権だと感じない人もいるかもしれない）、それを「特別だ」と思うからには、自分もその特権を欲していることになるのだろうか。
特権を持つことにつきまとうのは、持たない人間の上に立って優越感を感じていたいという、非常にいやらしい気持ちなのだろうか。
いや、誰かの上にたっているという意識ではなくて、あくまで自分には手に入らないものを、どうやら持っているらしい人々に、一方的に、なんとなく憧れる程度のもの。
そこはかとない憧れ。
NYに棲む、という特権について。

2泊3日という慌ただしい旅の中で、
もっとも印象に残っている、「特権」にまつわるシーンを紹介しよう。

NYに到着した初日の朝は、耳が痛くて涙が出そうなほどの寒さだった。
ダウンコートを着て耳あてをしていても、寒さがこたえて「ツライなあ・・・」と思ってしまう。ただ寒い、ではなくて、過酷なレベルの寒さだったのだ。
早朝にJFKについてホテルに荷物を預け、朝食を食べたあと、あまりの寒さにオットと娘がカフェでゆっくりしている間、それでもわたしはせっかく夢にまで見たNYに来たのだから、と、ひとりでうろうろとミッドタウンを歩いていた。
ふと、我が目を疑うものを見た。
高級そうなアパートメントのドアマンとなにか冗談をかわして歩道に飛び出してきた、まだティーンエイジャーと思われる、ほっそりとした白人の女性。
なんと半袖のTシャツに、ハーフパンツ、素足にスニーカー。片方の手にスポーツドリンクが入っているのであろう水筒、もう片方の手にはタオルが無造作に握られている。氷点下10度の世界に、その少女はほっそりとした、そして青白く透けそうな身体で、無謀にもほとんど防寒着なしで飛び込んできたのだ。なにか悪い冗談を見た気がして、わたしはたぶん口をぽかんとあけていたに違いない。
しかし謎はとけた。

少女は自分のアパートのすぐ2軒となりの建物に入っていった。フィットネスクラブの看板が出ていた。
なるほど、ここで今からワークアウトというわけね。自宅の延長のような場所にあるフィットネスクラブで。
そこはミッドタウンでNYでも一等地にあたり、その周りのアパートはいずれも高級であるはずだった。
いくらNYが不況に陥っても、やっぱりここに棲むにはそれなりの富が必要だ。あの少女は、おそらく家族と一緒にここに棲んでいるのだろう。生れたときからマンハッタンに棲んでいる。それが当たり前すぎて、特別なことだとも感じていない。
そういう人種がいるのだと知っていたような気がするが、
生ものの状態で「それ」を、こんな形で一瞬だけほとんど盗み見るように知ってしまったわたしは、とてもドギマギした。
あの少女は、マンハッタンでこれから紡がれる物語の主人公になれる可能性があるのだ。これまでに膨大に書かれてきたNYが舞台の物語の数々に続く、また新しい名作が生まれるとき、彼女は主人公、あるいは登場人物の一人になれるのだ。そういう可能性を持っている、まだ孵化していない、生卵みたいなもの。
その街に棲む特権とは、物語の登場人物になれるということなのではないか。
わたしはそういう意味でいつも、どこかの街に棲む誰かの特権について、憧れてきたように思う。

マンハッタンの、人気のない朝。とても寒い。

twitter

makeanovel
「ハーイ。今日はフォロワーのみんなに隠していた重要なことを打ち明けようと思うの。実はわたし、サラ・ジェシカ・パーカーなの。そう、アメリカ人で女優をやってる。SATCでキャリーの役をずっとやっていたというとすぐに分かってもらえるかしら」

「というか別に隠していたつもりもないの。単にわたしはずっと以前からハードコアなジャパメーション・ファンだったのが高じて日本語がかなり自在に操れるまでになっていたから、ツイッターでも日本語を使って、日本人と交流したかっただけなの」

「日本びいきなのは元々いろんなインタビューで答えているから誰も驚かないわよね。だから日本語でツイッターを始めるわって公にしちゃってもよかったのだけど、とりあえずは日本に棲むごく平凡な主婦っていう設定で実験的にはじめてみたのよ」

「そしたらそれが案外面白くてそのままズルズルと自分の正体を偽ったままになっちゃって。みんなに嘘をついていたことは申し訳なく思ってる。仕事が終わった後

、深夜のマンハッタンの自分のアパートから、さも日本にいるみたいに、朝ですオハヨーってやってたんだから・・・」

★★★★★★★

実はわたしはニューヨーク在住のサラ・ジェシカ・パーカーなんです。
と、ツイッターで真顔で打ち明けるツイートをしはじめたら、makeanovelはアタマがおかしくなったのだろうか、と心配されるんだろうか。
どこかに本当にそうだったのかも・・・とちらっとでも思ってしまう人はいるだろうか。
いずれにせよ、わたしはネットで仲良くしていると思っていたはずの人が、まるで嘘をついていても仕方ないと考えている。それを推奨したいとかいうわけではないが、そういうことも起こりうるのがネットだ。
わたしはネットではなくて、リアルの人間関係において、なにからなにまですっかり、すべて騙されていた経験もあるので、なにもネットの世界だけの話ではないと思っている。別に結婚詐欺にあったとかそういう被害があったわけじゃなくて、単にリアルな知り合いが、自分についてなにからなんまで全部嘘の情報をわたしに与えていたことがあるとき判明して仰天したというだけである。それこそ職業から学歴から棲んでいる場所、家族、なにからなんまで。それに附随する細かいエピソードまで。当時の生活について聞かされていたことも全部、事実ではなかった。一体人はここまで嘘をつきつづけることができるのかと、本当に本当に感心した。それはある、芸術表現の実験だったのかもしれないと今は考えることにしている。コンテンポラリー・アートというのはいろんなことをやるそうじゃないか。そう、わたしが大好きなソフィ・カルだって確かやりすぎて訴えられたことがある。
どこかに観客がいて、騙す知人と、騙されるわたしを、「鑑賞して」いたのではないか。

★★★★★★

しかしこの体験は示唆に富んでいたように思う。
誰かを騙して、金銭的・精神的にダメージを与えればそれは詐欺罪を問われる。法治国家において許される行為ではない。
しかし、もし、罪に問われない、誰にもダメージを与えない嘘だったらば？
わたしはその知人が事実ではない情報をわたしに与えていたことによって、なにか金

銭的にダメージを受けたということはない。相手は女性だから、とりあえず恋愛感情を絡めたなにか精神的なショックを受けてもいない。もちろん騙されていたことには少なからずショックを受けたが、それを法に訴えてもおそらく、彼女は罪に問われないだろう。
そして彼女はリアルな知り合いだったので、嘘をついていたことがわたしにばれたが、もしこれがネットの世界の知り合いで、一度も顔を合わしたりしなければ、わたしはずーっと彼女の話を信じていただろう。その場合、まったく誰にも不利益は生じない。
このことについて、わたしは時々考えてこんでしまうのだ。

★★★★★★★

ツイッタートラベラーという、真実を、しかもリアルタイムで発信して人に伝えるという作業をすることに惹かれたのは、だからわたしは、
どこまで嘘をついてもバレないことへの魅惑に暗黒の誘いを感じ取ったからではないか。
そのくせわたしはどこまでも嘘をつこうとはしないだろう。
躍起になってわたしの体験したことをありのままに伝えようとするだろうということもありありと分かっていた。
しかし真実を伝えようと躍起になればなるほど、今度は真実など到底伝わらないということに気づくはずだ。

インターネットをとても熱心にやってきたが、
わたしはずっとそのアンビバレントな部分に興味をひかれていたのだと思う。

だからわたしはツイッタートラベラーというものに、とても、なりたかった。

2011年2月20日のタイムズスクエアの早朝。この時間帯のネオンの透明感が忘れられない。

ツイッターでその模様をリアルタイムで中継をすることを条件にどこかへ旅行するとか、そのイベントに出席させてもらえる、というような募集はそれまでにも何度か見かけては惹かれていた。
詳細は覚えていないが、ツイッターをはじめてから（2009年の秋にツイッターを初めて始めたんだっけ。まだ2年も経ってないのだな）、一度、パリだったかどこかヨーロッパの街にいって映画祭に参加して、現地レポートをしてくれる人を募集しているものがあった。レポートしていただくのを条件にその場所までの航空券とホテル代は出しますよ、というような。そのときはかなり心が動いた。
ああ、いきたいなあ。でも子どもを置いて外国にだなんて、きっと不可能だよね。子どもを保育園に預けることはもうはじめていたような気がするが、丸一日、夜も預かってくれる、しかも何日も連続で、という保育園は存在しない。ただでさえ普段から仕事が忙しいオットにまさか何日か仕事を休んでくれと頼めるとは思えなかった。
そのときは確か募集要項を途中まで読んで諦めた。応募するだけしてみようかという気にもなれず、ただため息をついて諦めた。
いいえ嘘です。一応オットに打診した。
「もし選ばれたら喜んで仕事を休んで娘の面倒みてあげるよ」
とオットは答えた。しかし、心から、というのではなくて、まずは選ばれてごらん、

選ばれたのなら初めて悩めばいいではないか、というわたしに挑戦するような顔をしている。
オットはもしわたしが選ばれたら本当に約束を守る人だ。
でも、問題は、そう、
わたしが選ばれなくてはならないのだった。
そしてわたしは結局応募しなかった。
落選するのが怖かった・・・というより、応募要項にあった申し込みに必要な自己アピールの作文もろもろが意外と大変な量で、締切間際だったので、自分で勝手にリタイアしたのだった。本気でいきたければ家事もなにもかもなげうって挑戦すればよかったのに、とオットが嫌味っぽく言う気がして、わたしは棄権したことも告げなかった。でも、それをずっとうじうじと悩み続けた。ダメもとでも挑戦しなかったことに。

つづく

マンハッタンの巨大な博物館に雪の朝に行く。親子連れだらけだった。

そしてわたしはいつも1つ,2つは常に同時進行で怪しげな妄想を書き綴るというのが日常なのだが（あるいはそれを「小説」と呼んで、時にはブンガクショウなるものに応募したりすることもあるが、それで認められてそれが本になったりすることはない、という程度のものだから、やっぱり妄想を書き綴ったもの、というもの以上のものではない）、
わたしは今年の2月に入ってから、羽田空港にNY直行便が就航することを知って書き始めた「妄想」をずっと書いていた。
それがつまり、
http://p.booklog.jp/book/16317

↑ツイッターやこの電子書籍にも途中までまとめてある、上記にリンクした文章の連なりなのであるが、
読んでくださった方はご存知だと思うが、ツイッターのアカウントでリアルタイムで旅を綴っているものを、ほかの誰かが読んでいる、ということについて書いた小説である。いや、その前に頓挫してしまった、ハワイへのツイッタートラベラーについて書いた妄想もやはり、そうである。

ちなみにハワイ小説はこれ→
twitter小説「ハワイ紀行」

わたしは、旅をしているときの「リアルタイム」を、インターネットで発信している誰かがいて、それを読んでいる人がいる、という状況に、以前からずっとただならぬ興奮を感じていた。
自分で一ヶ月のバックパック旅行をしたとき、それをほとんどリアルタイムでmixi日記に書き綴ったこともある。

ちなみにそれはこれ→
イタリア旅行記「夜の底の旅」

だから、そのNY直行便に乗ってNYに行く人物を登場させようという妄想を書いていたときに、アメリカン航空が、就航便に乗ってNYへいくツイッタートラベラーの募集をしているのを見たときは、妄想世界が自分の現実に流入してきたような、一種の気持ち悪さを感じた。すぐに物語に影響されるタチなので、『1Q84』みたいに、パラレルワールドに紛れ込んでしまったことを疑った。

しかし、タチの悪い冗談みたいな、わたしの妄想の延長の世界なのだとしても、それでもわたしは申し込みをせずにはいられなかった。
映画祭のツイッターレポーターに申し込まないで悔しい思いをしたことはもう関係なくなっていた。
これが物語の世界の続きなのであれば、やっぱりわたしは物語の世界の法則に従って、それに応募するしかないのではないか。
『1Q84』の、タマルと青豆が話題にしていた、物語に拳銃が登場すれば、それは絶対に発砲されなくてはいけないという定めがあるという話のように、
わたしの物語の生んだようなその募集を見かけてしまったら、やはり応募するしか道はないのではないかと。

羽田発、アメリカン航空のNY直行、就航便の機内食。

時差というものにロマンを感じ、ほとんど時差そのものに恋するように外国在住の相手と恋するということに憧れていたような気がする。

★★★★★★★

『午前4時東京で会いますか』という美しい装丁の本があって、
表紙と裏表紙にはそれぞれ、未明の時の中で迷子になったように心もとない風情のエッフェル塔と東京タワーが中心に据えられたパリと東京の写真。そしてその時間を寒天かなにかでかためて永遠に閉じ込めてしまうようにトレーシングペーパーがかけられている凝ったつくりだ。

――あなたが棲む東京で日が昇るとき、わたしが暮らすパリは真夜中です。

それは東京に棲むフランス人男性とパリに棲む中国出身の女性作家によるフランス語でなされた文通を翻訳したもの、を束ねた本だ。

シャネル日本法人社長リシャール・コラスと作家、シャン・サによる。当然フィクションではないが、手紙とは、ではノンフィクションなのだろうか。一体、手紙
とは・・・。

★★★★★★★

わたしは時差のある国の誰かに恋をすることを夢想して生きてきた。
それは特定の誰かというよりも、憧れている街に棲んでいる誰でもないX氏である。
ただ時差のなかで誰かを思っていたいし、時差を超えて思いが言葉になったり電子メールになったりして届いたりすることがロマンティックに感じるという単純な、子どもじみた憧れである。

just now
今この瞬間に、同じ時を生きているというのに、別々の空間のみならず、違う時間帯を生きていること。昼と夜を永遠に分かち合えない者どうし。
もしその二人が恋に落ちた場合、どちらがどちらの朝に合わせて、または夜に合わせるというのか。あるいは一緒に暮らすことを決めたとして、どちらがどちらの朝へ、または夜に吸収されるようにして従い、そして自分にとっての朝と夜と決別するんだろうか。

★★★★★★★

そんなほんとうに子どもじみた憧れを、
わたしは時差というものを知ったときから抱き続けている気がする。

しかし、わたしはこの憧れを、ほとんど燻らせるようにして、いや焦げ付くようにして抱き続けてきた。だからそんなきれいなものじゃない。
鬱屈とした青春時代、そしてあきれるくらい愚かな20代、
救いようがないくらい真っ暗闇なわたしの精神の、
しかし端っこにちゃんとずっとひっかかっていてくれた。
どこか遠い場所、それはもう、時差があるくらいに遠い場所に、憧れる気持ち。
自分でお金を稼ぐようになると、
わたしはちょっとでも遠くにいくことを試みるようになる。
どうせ帰って来なければならないことは分かっていたけれど、
でも、
一時的にせよ、
どこか遠くにいけるのは、心がせいせいした。

2011年2月20日、早朝の羽田空港国際ターミナル

そして、アメリカン航空が募集したツイッタートラベラーに申し込んで、確かもう2日後くらいが締切り、当選者発表だったと思う。さらに旅行の出発まで2週間あったかなかったか。
ここでもしムラカミハルキ的パラレルワールドに紛れこんでいたら、
もちろんそもそもこのツイッタートラベラーなる妄想を生み出した（と本人は思い込んでいる）わたしが当選するはずである。
しかし、ここで大抵のことは、そのとおりにことが運ばないのでパラレルワールドにワープしたなどという妄想はそこで断ち切れられる。
ところが、わたしのところには、「猫の国」への招待状が届いてしまったようだ。
iPhoneが振動したのでディスプレイを見たら、誰かからのメンションが届いたという表示が壁紙に重なって表示されている。どうもアメリカン航空のアカウントからのような気がする。今日はツイッタートラベラーの発表の日だったから、ずっと気にはしていた。いや、私宛の、そのメンションだけを、
「待っていたような気がする」。

ツイッタートラベラーは、@makeanovel さんに決定いたしました。

確かにそう書いてあった。
ここはパラレルワールドだから、その結果は当然だという気もした。
でも、じっとりと汗をかくのを感じた。
幾度も目の錯覚ではないかと目をこすったりして、それがどうも逃れようのない真実だと知ると、
わたしは、当然喜ばないとと、義務のように感じる。
本当に嬉しい！と喜ぶわたしと、
もう一人の、別の世界に紛れてしまった気がして怖がっているいるわたしがいる。

ツイッタートラベラーに当選しました！夢じゃないよね？夢なら覚めないで。

夢じゃないよね。どうか夢なら覚めて！と書きたかったような気もしたが、
そんなことを書いてもとの世界へ戻れる気はしなかった。
ここは猫の国だから。

それから出発までの２週間は不気味な静けさのうちに過ぎていった。
何事もスムーズに進んでいく。
全ての障害はわたしが気づく前に、こっそりと注意深く取り払われてしまっている。
ほとんど平坦な道を、しかも動く歩道みたいなのに乗って、
そう、コンコースを搭乗口まで進むように、
ひたすら出発へ向かってわたしは進んでいく。
自分の思い込みを、どこかで清算して、
これは紛れもない現実なのだと認めたかったが、
もうどこでアタマを切り替えてよいのかわからなかった。

気がつくと日付変更線は日本時間での2月20日を跨いでいて、
わたしたち一家は羽田空港に向かうタクシーに乗り込むところだ。